

水泳「水辺文化」分科会の 研究・実践の流れ

2021.12.28 オンライン冬大会

今日の話の流れ（40分）

1. 水泳が危ない
2. なぜ水泳「水辺文化」分科会なのか
3. 水泳「水辺文化」分科会がやってきたこと
 - (1) 学校づくり・職場づくりの重視
 - (2) 能力別指導（習熟度別指導）と対峙
 - (3) 水泳実践の可能性を追究
4. 水泳「水辺文化」研究・実践の流れ
 - (1) ドル平誕生から系統性研究（1960年代～）
 - (2) 系統的指導とグループ学習の統一（1980年代後半～）
 - (3) 教科内容研究（1990年～）
 - (4) 教育課程研究（2000年～）
 - (5) 授業づくり研究（2005年～）
 - (6) 現在の実践について
5. これからに向けて

映像で振り返る研究・実践（20分）

朝日新聞「耕論から」

制野俊弘氏（和光大）は、自身の東日本大震災の体験から「水難から命を守る基礎学力」として水泳は不可欠

「地域に一つプールを確保して融通し合い、民間に指導を委託する。その分浮いた資金や労力を、オンライン授業の環境づくりに振り向ける」
渡辺由美子氏（NPO法人キッズドア理事長）

「水泳授業は先生も負担が大きい。水難事故を防ぐ指導や、泳ぎに触れる機会を年に数回、イベント的にすれば十分」
高橋秀実氏（ノンフィクション作家）としている。

水泳を取り巻く諸問題

プールの老朽化⇒改修が当たり前と言えない⇒壊して跡地利用にしたら
千葉県佐倉市 大阪府枚方市

教師の働き方改革⇒夏期休業中の教師の負担。
プール開放が社会体育に位置付いていない。
浄化槽の稼働、薬品投与
⇒夏期休業中の水泳指導
水泳指導そのものの体への負担
プール開放を行っても参加者が少ない。

＜コロナ禍以前の水泳指導の変化＞

指導回数、指導時間の大幅減

夏休み中の指導の中止、回数減⇒緑のプール

二学期の水泳をなくす⇒運動会の練習に⇒子どもが熱中症で倒れる

中島滋章氏（佐賀）これらの風潮⇒「水泳軽視」
「水泳が学校で身につけるべき学力と捉えられていない」
「水泳で何を教えるのかが今まさに問われているのではないか」
「泳げるようにするだけではない、『水辺文化』を教材にすることの再確認を」

水泳を取り巻く危機的な状況に対して、それでも必要な根拠を「水辺文化」をもって示す必要がある。「水泳軽視」に対して「水辺文化」がどう対峙できるのかという課題が分科会に突きつけられている。



分科会での討議が必要

2000年中標津大会で「水泳分科会」から、水泳「水辺文化」分科会へと名称変更

90年代の教科内容研究では、スポーツ文化研究の蓄積から、実験的実践が数多く報告され、水泳実践が一気に開花した時期であった。

⇒「水泳」という範疇では収まりきれず、「水辺文化」と括る方が相応しい。

研究対象を「水泳」よりは「水辺文化」というもっと広い枠組みから教材化しようとした。

「水辺文化」(すいへんぶんか)とするのは、(みずべ)であると海岸を想起し、そこでの活動に限定されるというイメージがあるため。〈中島滋章氏の提案から〉

水泳「水辺文化」分科会がやってきたこと

①学校づくり・職場づくりの重視

学級独自で実践が行えない。学年の同意が必要。

学校独自の教育課程があり、それに基づいた検定表、進級表がある。

②能力別指導（習熟度別指導）と対峙 能力別指導が一般的な水泳指導

③水泳実践の可能性を追究

「泳げてなんぼ」の水泳指導の見直し
90年代の教科内容研究



水泳「水辺文化」分科会 研究・実践の流れ

- (1) ドル平誕生から系統性研究(1960年代～)
- (2) 系統的指導とグループ学習の統一 (1980年代後半～)
- (3) 教科内容研究 (1990年～)
1995東京大会特別講座「中村敏雄講演」
- (4) 教育課程研究(2000年～)
分科会の名称を水泳「水辺文化」分科会へ
- (5) 授業づくり研究(2005年～)



(1) ドル平誕生から系統性研究(60年代～)

子どものつまずきが「呼吸」にあることに着目し、60年代に集団的な研究から考え出されたのが「ドル平泳法」である。

その後、技術指導の系統性研究により、「ドル平泳法の指導」が確立される。ドル平→バタフライ→クロール→平泳ぎ→背泳という発展過程が考えられる。

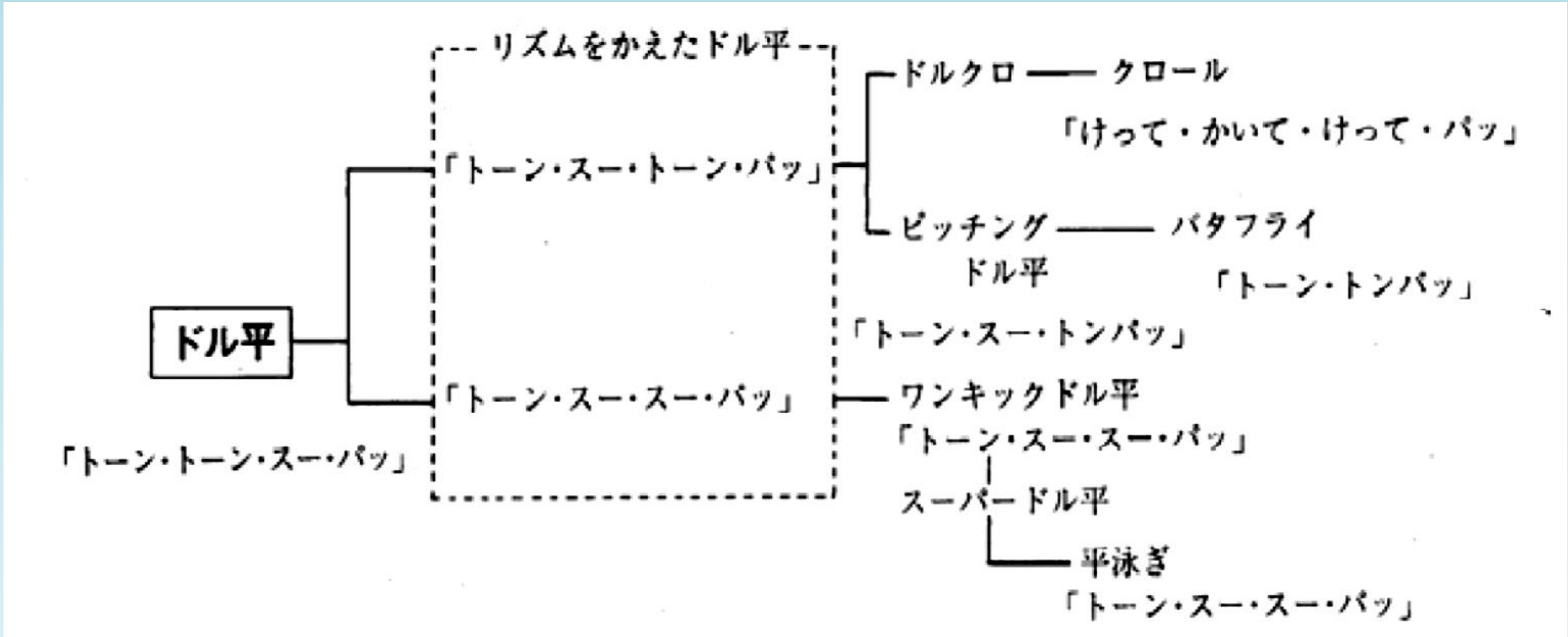
「ドル平泳法の教える中身を明らかにする」(85橋本)

「水泳の運動技術と主体的学習」(86大貫)

「考える・わかる指導系統へのアプローチ」(86大阪水プロ)

リズム変換により、近代泳法の習得を可能にした。

水泳「水辺文化」分科会 研究・実践の流れ



ドル平は、呼吸・リズム・リラックスを大切にした泳法

(2) 系統的指導とグループ学習の統一（80年代後半～）

技術認識を深め、それを学習集団が共通のものとしなければ、みんなが泳げるようにはならない。この課題を克服するために、グループ学習が実践の中心的な課題となる。

ドル平または近代泳法に至る技術の系統性について、子どもが観察や実験を通して見つけて行く授業であり、学習集団をどう組織するのかということに力点が置かれていた。従来の指示→活動という殆どの水泳指導で見られる一斉指導から、グループ学習への転換が図られていった。

「自分と友達 現在・過去・未来の泳ぎがわかる」(87飯島)

「ぼくらのドル平研究」(89黒野)

「泳ぎの感動を全ての子に」(90大貫)

「授業計画を子どもの手に」(90中川)

「みんなでさがそう平泳ぎへの道」(93牧野)

「ドル平の秘伝書づくり」(95渋谷)

「みんなで泳げるようになろう。少し考えて」(00佐々木)

「6年個人メドレーに挑む」(06中川)



発問型グループ学習

ほとんどの水泳指導は、教師の指示⇒活動という流れで授業が進んでいくが、教師から与えられた課題（発問）に対して、子どもが観察や実験を繰り返しながら、泳ぎに欠かせない技術ポイントを学んでいくスタイルが発問型グループ学習であった。

- ・教師の投げかけに対して、練習計画を立て、それを元にグループで実験を行う。練習計画⇒実践⇒まとめという1時間の授業の流れができていた。

- ・単元を、実技オリエンテーション（発問に対しての答えを見つける段階）＋習熟練習（見つけた答えを元に学習課題を立て、習熟する段階）と大きく2つの段階を経て学習が進められた。

— ク ロ — ル —			— 平 泳 ぎ —		
③	②	①	③	②	①
ローリングの意識	力をぬいたバタ足	顔を横にする呼吸法	カエル足の意識	頭の起こしと足の引きつけの意識	手のかきの意識
					教えるたい内容
息つきをした方の腕を水に入れた時、前に伸ばすのと、入れた所で浮かすのでは、どちらがよいか。	両足キック↓バタ足へ、疲れない方法を考える。	腰から下が沈まないように、顔を横にして□を出す方法や観察ポイントを見つける。	カエル足にするための練習方法や補助、泳ぐ意識の仕方考える。	スーパードル平のリズムで、いつ顔をあげ始めるか。	ワンキックドル平でよりよく進む方法を考える。
					発問

授業の実際

時

平泳ぎの技術要素を探る I

① V T R 視聴

教師の泳ぐ「ドル平」「平泳ぎ」の V T R をみる。
 ・何が違うのか、どこが違うのかに着目させる。

② 違うところを発表（足のキック、リズム、
 手のかき、息つぎの4つが出る）

3 ③ 自分たちのグループは何について研究するの
 かをはっきりさせる。

④ それぞれの技術要素で、どのような調べ方がある
 のかを考える。

※ 「どのような調べ方があるのでしょうか？」と
 いう実験方法の立て方の説明は、子ども達にはわ
 かりにくいようだったので、「例えば、手のかき
 だとどのようなかき方がありますか？」と発問し、
 何人かの子どもを前に出して、手のかきの格好を
 させ、「それを①番に、それを②番に・・・」とい
 うふうの説明をした。

平泳ぎの技術要素を探る II

① 実験をするための条件の統一を指示

（例えば、「手のかき」を調べるグループは、ド
 ル平のリズムで泳ぎ、手のかきだけを変えて泳ぐ）

息つぎを研究テーマにした
 グループの一例

（いきつぎ）についての研究

□ 実験方法

平泳ぎは

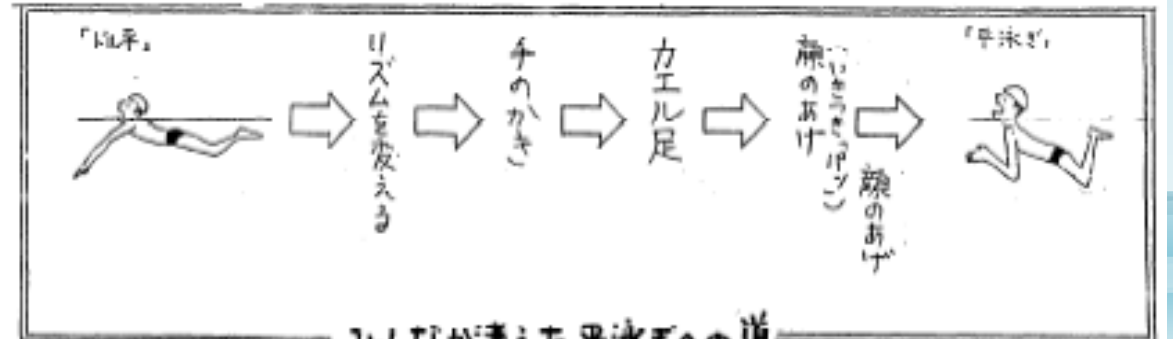
予想

- ① 水面から顔全体を上げる。
- ② 水面からあごまでを上げる。
- ③ 「スーパー」と長く息をする。
- ④ 「スーパッ」とまとめて息をする。
 ・自分の予想（①と③）だと思う。

□ 実験結果

実験

- ① 息がとてもしやすかった。
- ② アゴまでだと口がしずんでしまう。
- ③ パーッと長く間にしずんでしまう。
- ④ まとめてはくので息がしやすい。



ドル平秘伝書・8班

課題 1~8までしてきた
ことを絵・文字などでおしえます。

課題 7. 水がこわい人が水に入れるようにするには？
・課題解決のための実験

1. 手や足に水をかけて
なれさせる

※考えられている人たちの体感に
合わせてよー!!

2. 口からじゅんじゅんに
もぐっていく

最初ははなをつまんでもよい

楽しいように見せる

…抱え切れないほどの宿題とアドバイスを持ち帰り、悶々と四苦八苦した末に考えついたのが「秘伝書」だった。泳げる子が泳げない子に教えるということを前面に押し出すと、できない子が劣等感を持つ。また、泳げる子が飽きてしまうことも予想される。そこで、グループで泳げない子に教える中で、泳げるようになるための秘密(=普遍的な法則や原理)を探り、それをまとめて水泳の「秘伝書」を作ること目標とすることにしたのである。こうすれば、泳げない子のつまづきや気持ちがわからなければ「秘伝書」を作れないので、泳げない子がプレッシャーを感じずに学習の中心になるし、泳げる子も自分の力を発揮しなければならず、グループ学習が効果的になる…こんなふうには、授業の柱ができあがっていった。

『宮城の体育実践』創文企画2012年、p223

(3) 教科内容研究 (1990年～)

① 泳法の発展史を追体験する授業

- ・ 歴史の1地点に立たせて、どんな泳法が考えられたのを予想
- ・ 技術改良によって速くなることの理解
- ・ 昔の競技大会の再現

- 「水泳にも生き立ちがあったんよ」(94中川)
- 「平泳ぎはなぜカエル足か」(94牧野)
- 「水泳の歴史をグループで研究しよう」(96澤口・佐々木)
- 「クロールの歴史を学ぶ」(99牧野)
- 「背泳ぎはどのようにして生まれたのか？」(02牧野)

② 日本泳法そのものを扱う授業

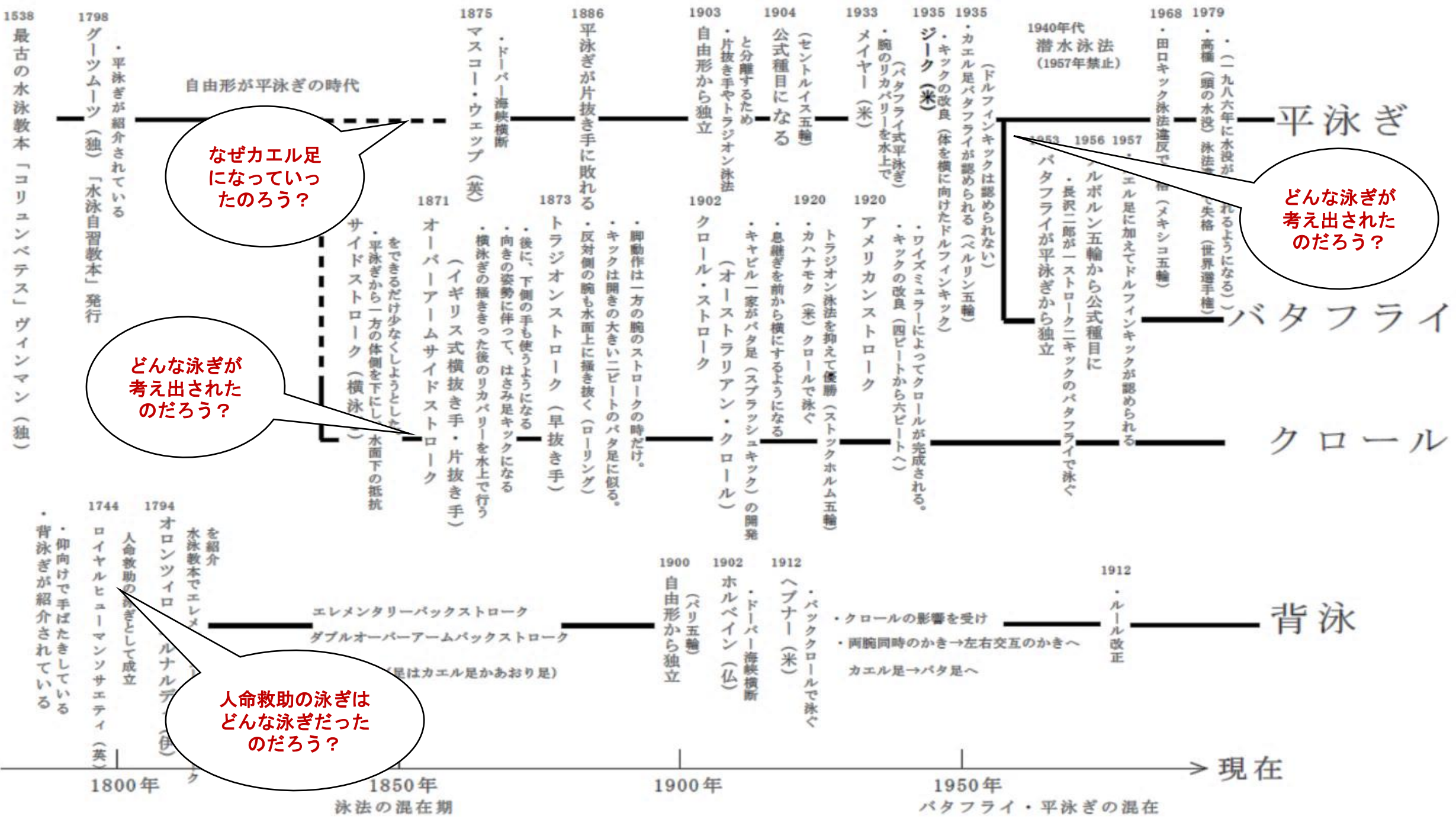
- ・ 父母、祖父母への水泳の聞き取り
- ・ 近代泳法と違う日本泳法の良さを教えようとしたが・・・

- 「水辺文化の授業づくり」(97平田)
- 「3つの平泳ぎ」(97牧野)
- 「『日本泳法』実践化の可能性」(01牧野)
- 「和光中の臨海学校の取り組み」(08大和)

③ 低学年の水泳の在り方を検討

- ・ 表現としての「お話水泳」

- 「低学年のグループ学習」(94・95藤井)
- 「低学年のおはなし水泳」(98中川)
- 「いろいろな泳ぎに発展できる豊かな学びを」(05平田)



なぜカエル足
になっていっ
たのろう？

どんな泳ぎが
考え出された
のたろう？

どんな泳ぎが
考え出された
のたろう？

人命救助の泳ぎは
どんな泳ぎだった
のたろう？

クロールの歴史を学ぶ(1998年)

①横泳ぎの習熟
 横泳ぎの指導法としては、①体を横に向けてのけのび→②体を横に向けてのけのび+うでの掻き→③ビート板を持ってのけのび足の習熟④体を横に向けてのけのび+うでの掻き+はさみ足の流れで習熟を図った。息つきは水中で行わないので顔は常に水面に出ているが、平泳ぎと同じリズム「トーン・スー・スー・パッ」で泳ぐように指示した。横泳ぎの技術ポイントとして子ども達が見つけたのは以下のようにまとめられる。

- ・はさみ足（ひざを大きく曲げる）
- ・手は野球のセーフに、またはパレエの手
- ・体が伸びたときに（腕を掻いたとき）に息をためる。

G	名前	手・足・リズムなど
1	ドメインクロー	クローの手で足はドメインクロー
2	バタフライバト	バタフライの手でバタ足。バタ足の後に両手を後ろにかく
3	平泳	クローの手で足はドメインクロー。リズムは「どばーん・スイスイ・パッ」
4	プレストクロー	クローの手で足はドメインクロー。リズムは「けってーかいてーけってーばっ」
5	ドメインサイドストローク	クローの手でドメインクロー「トーン・トーン」
6	カエル足クロー	クローの手で足はドメインクロー。手は3回掻いて一回ける

②歴史の追体験の段階
 ○「横泳ぎ→?→クロール」について
 <1>横泳ぎからクロールの成立過程で、どんな泳ぎが存在していたのかをグループで予想<右表>
 <2>実際に泳げるのかどうか確かめる。
 <3>グループごとに発表する。
 <4>史実を知る。
 グループで考えた泳ぎが、実際に泳げるのかどうか確かめ発表した後、正解である「オーバーアームサイドストローク」や「トラジオンストローク」を泳いで示した。その後、実際に子ども達に2つの泳法で泳いでもらったが、子ども達は泳ぎにくさを経験したようである。特にトラジオンは手を掻く際、体が沈むため難しかったようだった。

横泳ぎ→体を横にしてかいた手を水中でもどす
 オーバーアーム→片手を空中でもどす
 トラジオン→空中で両手をもどす

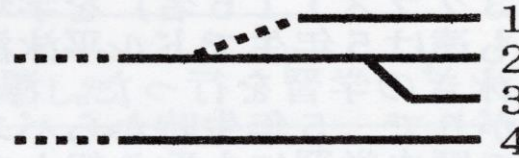
<各泳法で泳いだ結果（25mのタイム）>

児童	横泳ぎ	オーバーアーム	トラジオン	クロール
A	● 34.02	31.97	28.91	◎ 22.16
B	● 38.43	31.85	33.41	◎ 19.35
C	● 33.79	29.85	—	◎ 25.28
D	● 37.76	—	30.69	◎ 20.94
E	42.49	● 44.43	—	◎ 27.13
F	● 27.90	25.48	26.14	◎ 15.98

(◎—一番速い ●—一番遅い)

「オーバーアームやトラジオンは、なぜ横泳ぎからわざわざむずかしくしたのかがわかった。それは、速く泳ぐためだった。その理由は、上から手をもどすと、水のていこうを受けず、勢いが殺されないからだ。（Y）」

3 「なぜ人間は泳ぐようになったのか」子ども達に予想させ、みんなで考えた。
 ・ ①魚や貝をとるため②暑くて水浴びのため③戦争のため④おぼれる人を助けるため
 4 の4点をおさえた。
 次 「近代泳法のおおまかな発展史について」の学習を行った。図のような4本の線の
 (5 発展史にどの泳法があてはまるのかを予想させた。
 7) そのあと各泳法の分岐点を次の6つに絞って各班に
 課題を選択させた。
 ①背泳ぎの発展史
 ②平泳ぎからバタフライへの分岐点
 ③平泳ぎからサイドストロークへ
 ④サイドストロークからオーバーアームサイドストロークへ
 ⑤オーバーアームからトラジオンストロークへ
 ⑥トラジオンストロークからクロールへ



1. クロール
2. 平泳ぎ
3. バタフライ
4. 背泳

5 ○グループ練習の時間として、クロール・平泳ぎの実技オリテで学習したことをも
 とに習熟練習として各班で練習計画を立てて、練習させた。
 8 ○グループ研究の時間として、上の課題にそって、文献をもとに昔の泳ぎ方を再現
 次 していった。あわせて「どこを改良したのか」「どのように考えて変化させたの
 か」考えさせた。

12 各班の発表した泳法の練習時間を1時間とり、いよいよ年代ごとの水泳大会を再現
 した。①1837年イギリス、ユニバーサルレース
 14 ②1869年イギリス、メトロポリタン水泳クラブ
 次 ③1896年ギリシャ、第1回アテネ五輪
 (19 ④1908年イギリス、第4回ロンドン五輪
 ⑤1936年ドイツ、第11回ベルリン五輪
) それぞれ、いろいろな泳法が混ざった大会であり、違う泳法が同じ種目で競われて
 22 いたことを追体験した。

中村敏雄講演を受けて

95年東京大会特別講座の中で、

「今やっている水泳指導は競泳であって、水泳指導のごく一部にすぎない」

「ドル平の先にあるものは近代泳法だけではない」

「ドル平は近代資本主義に対するものとして考えられたものにも関わらず、それが近代泳法に直結して良いのか」

「近代泳法が日本に入ってくるまでは、日本泳法が中心であった。日本泳法には、近代泳法にない内容が数多くあるにもかかわらず、それを教えなくていいのか」

というような内容を述べられた。

「中村氏の提起によって、プールという人工物の中での水泳を対象にするだけでなく、自然環境の中での水泳を対象にすることも可能であり、水と人との共存を目指す水泳指導の在り方を私たちに問われている気がした。」

(中村講演を聴いた水泳分科会の人感想から)

そうだ！日本泳法だ！—とても単純

競泳の平泳ぎ	日本泳法の平泳ぎ	潜水泳法
潜水泳法の次に速い	一番遅い	一番速い
潜水泳法の次に泳ぎやすい	泳ぎにくい <ul style="list-style-type: none"> ・顔を上げるのがしんどい ・バランスがとりにくい ・足が沈む 	一番泳ぎやすい

	競泳の平泳ぎ	日本泳法	潜水泳法
松原	◎21.48	●25.61	22.32
有本	◎26.20	●30.16	27.66
吉井	29.26	●32.44	◎27.93

(◎速い ●遅い)

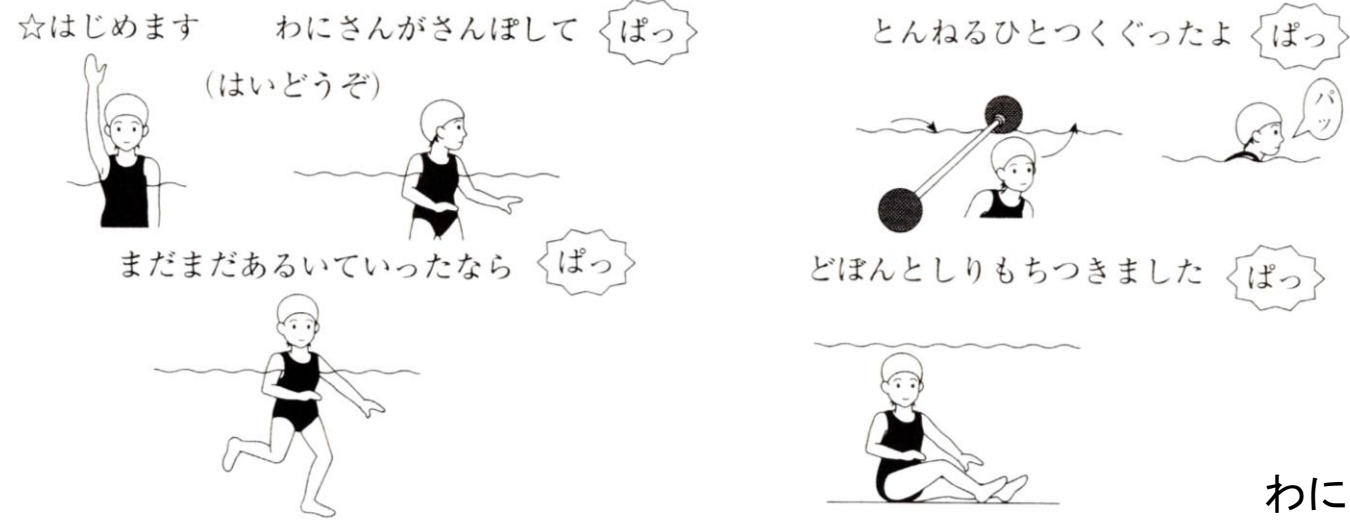
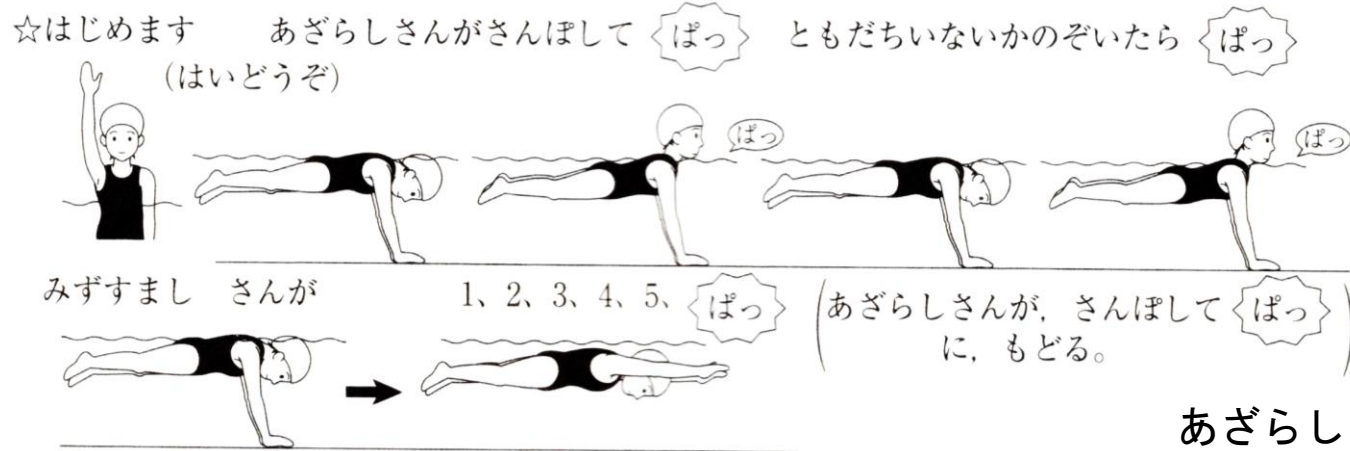
どれをとっても、日本泳法の否定的な面が際立ち、「だから今では、泳がれなくなった」という子どもの受け止め方をさせてしまった。プールで日本泳法を指導することの難しさが分かった。

お話水泳

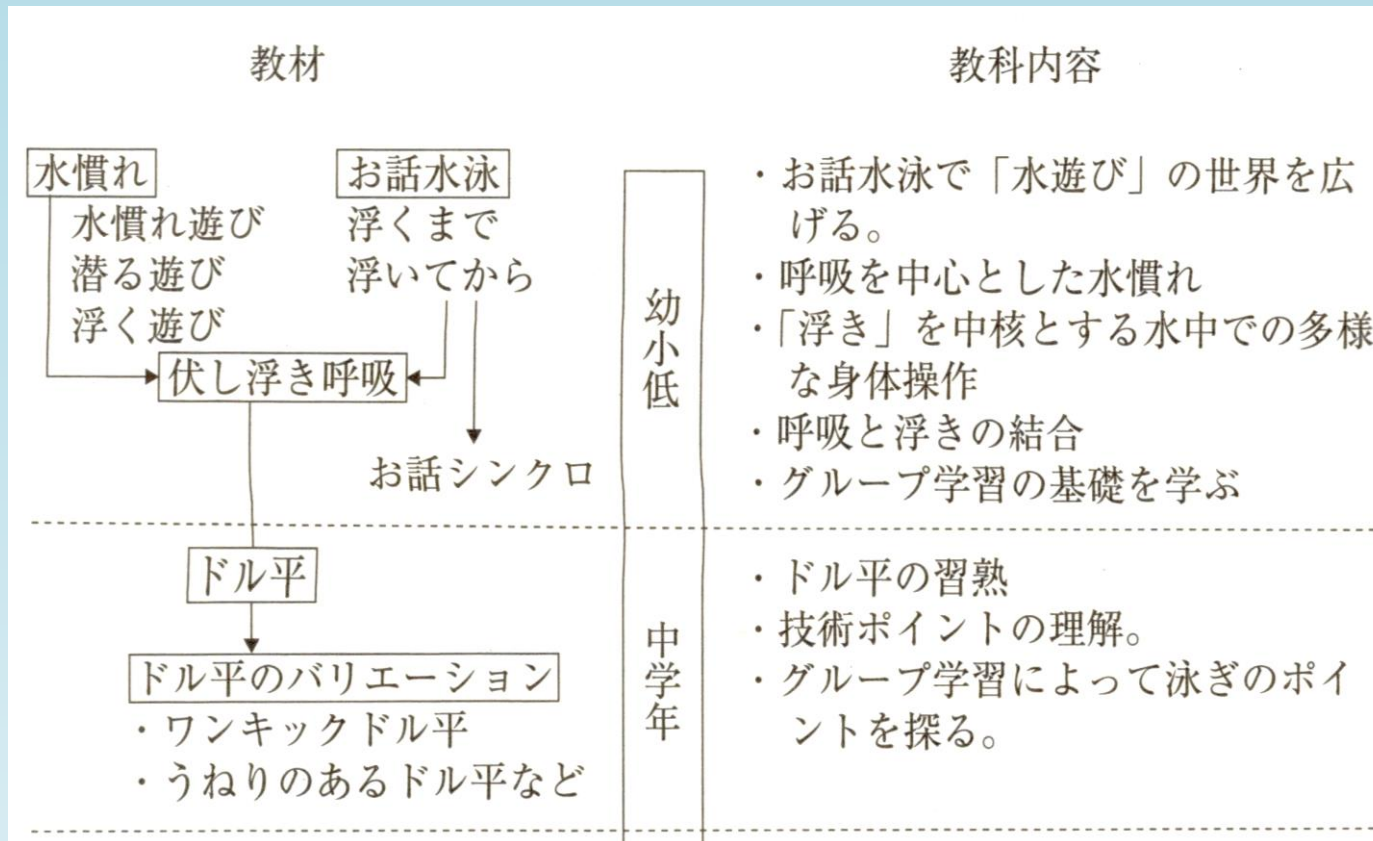
従来の低学年の水泳指導はドル平の下請的な段階と考えられてきた。



しかし、浮けたからと言ってすぐにドル平の系統性に結びつけるのでない。多様な身体操作の経験から「水遊び」独自の世界を広げたり、また、「表現」としての可能性も含まれたりしていることがわかってきた。



(4) 教育課程研究(2000年～)



低学年

「水慣れ～浮き～呼吸を含んだ浮き」という流れで学習を進める。「お話水泳」を教材とする。

中学年

ドル平習熟と近代泳法に繋がるドル平のバリエーション
(うねりのあるドル平やワンキックドル平、ドルクロなど)

「水泳の教育課程(小学校)」(02大阪水プロ)

「私たちの教育課程試案(高学年)」(03瀬見)

「水泳の教育課程をみんなが使えるものに」(04佐々木)

「教育課程をみんなのものに」(05中島)

<p>平泳ぎ クロール 背泳ぎ バタフライ</p> <p>日本泳法 (体験) 着衣泳</p>	<p>高学年</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・近代泳法の習熟と系統性の理解 ・泳法の発展史 ・日本泳法の体験 ・教室でする水泳 ・水泳の知識と救助法
<p>競泳</p> <p>速さについての技術学習 個人メドレー シンクロ</p> <p>日本泳法を含む水辺文化</p> <p>臨海学習 横泳ぎ、抜き手、立ち泳ぎ</p> <p>教室でする水泳</p> <p>水泳の発展史 水着・プールなど</p>	<p>中学 (高校)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・近代泳法の習熟 ・近代泳法の発展史 (歴史の追体験) ・日本泳法を学習 ・教室でする水泳 (泳法の歴史の理解、プールや水着) ・水泳実習を通しての自治的活動

高学年

近代泳法を学ぶが、習熟だけでなく、歴史を学ぶことを通して近代泳法が推進力を増す泳ぎ、抵抗を少なくした泳ぎであることなどを学習する。

日本泳法の体験

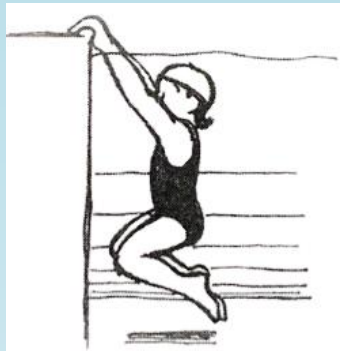
中学校・高校

競泳
日本泳法

- 「水泳の教育課程 (小学校)」(02大阪水プロ)
- 「私たちの教育課程試案(高学年)」(03瀬見)
- 「水泳の教育課程をみんなが使えるものに」(04佐々木)
- 「教育課程をみんなのものに」(05中島)

(5) 授業づくり研究 (2005年～)

小平サークル（東京）の水泳指導



小平サークルの特長は、**浮力を用いた呼吸法**をまず習得させ、**斜め浮き**からドル平へ、そして**ワンキックドル平**から近代泳法に繋げる所にある。

物体が水の中に落ちると、沈んだ後は比重が1より小さい場合は**浮力**によって水面に上がろうとする。その力を最大限に利用して呼吸が行われるので、無理なく呼吸することができる。プールサイドを両手で持ち**正座位**になり**呼吸法**を身につける。次の段階として、斜め浮きからドル平を習熟していく。キックもワンキックであり、伏し浮きの状態を長く保ったドル平が完成される。

ドル平泳法の指導手順

★プールの底につく足の裏

①壁に手を置いて正座で浮いて呼吸 (連続 10 回)
下唇が出たら「パッ」。手に力を入れないでね。

②片手だけ手を置いて正座で浮いて (連続 10 回)

③両手を浮かべて浮いてきたら呼吸 (連続 10 回以上)
「パッ」と同時に静かに水を押さえるんだ。

④上体を前傾させ、浮いてきたら呼吸 (連続 10 回以上)
正座のまま。「パッ」のあと、あごを出すようにしよう。

⑤足の親指を底につけて、浮いてきたら呼吸 (連続 10 回以上)
プールの底をけらずに親指の爪だけつけるようにする。

伏し浮きして立つ

⑥伏し浮き→呼吸→伏し浮き→立つ
手の動きはゆっくり、肩が出ないように。

⑦伏し浮きしながら呼吸の連続 (10 回)
頭の一部が出た呼吸動作。同じリズムで連続してやろう。手の動きもゆっくり。肩が出ないように。

⑧ドル平
「パッ」→「腕を前に伸ばしながら頭を入れる」→「トーンと足の甲で押さえる」というリズムで。

⑨ドル平で 25～100 m
「のびしてパーしてポチャンしてトーン」のリズム。あごが先に動き、その後で手が動くんだよ。

分科会でのドル平指導

水泳分科会（主に大阪水プロ）では、沈み込みの少ない息継ぎにするために、**ゆっくりとした首の動作**を重視している。

「ニューツ」とした首の動きの習得は困難なので、初期の段階から時間をかけて教えようとする。従来行ってきた分科会での指導法と、沈み込みやうねりを使って泳ぐ小平サークルの指導法にはこのような見解の相違がある。

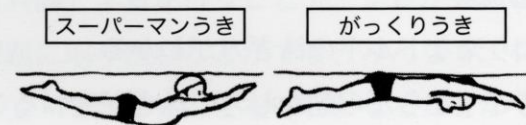
また、ワンキックかツーキックかという問いにも、ゆっくりとしたドル平を目指す小平サークルと、4拍子のリズムによって動きを獲得させようとする点での相違がある。

指導法の交流をすることで長短が分かり、現在ではそれぞれのやり方を取り入れ、ドル平の指導を行っている。

ドル平泳法の指導手順

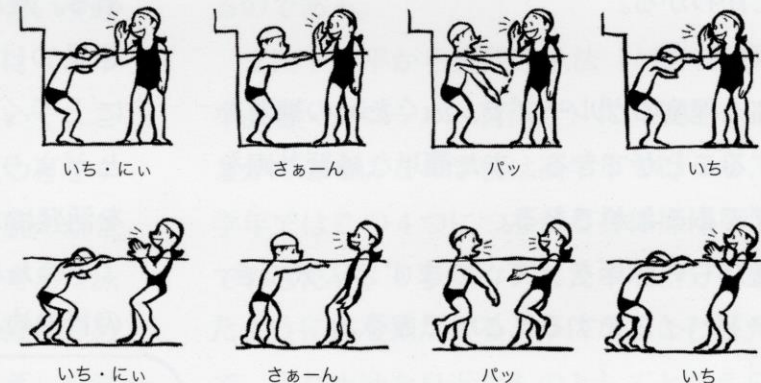
浮き方

あごの上げ下げ(見るところをかえること)によって浮き方が変わる。



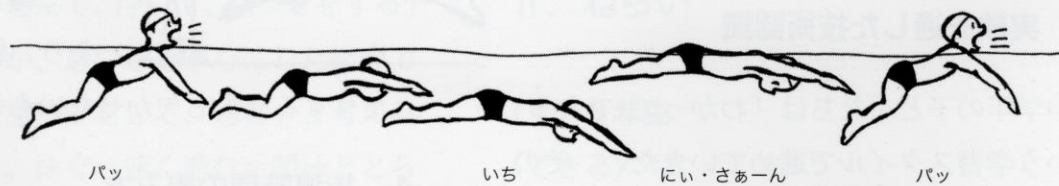
息つき

息つきは「パツ」と勢いよく息を吐き出す。そのとき、あごを動かして、水面からあごがでたら「パツ」をする。リズムは「いち・にい・さあ〜ん・パツ」。



ふし浮き呼吸

浮きながら息つき「パツ」をする。すると体が沈むが、がっくり浮きを行い、背中が水上にできるまでじっと待つ。浮いたらあごを上げて息つき「パツ」を行う。息つぎの時、手は軽く水をおさえるようにすると良い。リズムは「いち・にい・さあ〜ん・パツ」。



ドル平

ふし浮き呼吸に足をつけて行う。「息つき」や「ふし浮き呼吸」のときと同じリズム（いち・にい・さあ〜ん・パツ）で行う。徐々に「けってー、けってー、のびてー、パツ」に変えていくと良い。



現在の実践動向

○シンクロ実践（リズム水泳、音楽水泳）

- 「集団リズム水泳」(06有馬)
- 「5年生のシンクロ」(11池内)
- 「お話水泳や歌声水泳（15児玉）」
- 「音楽水泳で楽しい水の世界を」(19中島)

○日本泳法の教材化

水泳の授業はプールという「静かな水」で泳ぐという限定されたものに対して、うずまき（洗濯機、流れるプール）で「動く水」を作って「日本泳法」を教えるという実践も続けられている。

- 「動く水でのドル平指導」(12牧野)
- 「流れる水でクロールを泳ごう」(13佐々木)
- 「静かな水から動く水への水泳指導」(16牧野)

○水泳の意味を問い直す

支援学校、支援学級での水泳指導、何のために泳ぐのかを問う

- 「肢体不自由児にドル平を指導して」(07渋谷)
- 「河根小の水泳 4年間」(12中岡)
- 「水泳から命を考える」(17中島)。



動く水（渦巻き）中を平泳ぎで泳ぐ



順下から抜き手で泳ぐ

水泳「水辺文化」分科会のこれから

○水泳指導のジレンマ

分科会では、初心者指導のドル平から、ドル平から近代泳法に繋げる系統性研究を深めてきた。それは分科会の成果であるが、中村氏の意図とはかけ離れた方向に研究・実践を進めてきたということも事実である。

ドル平の目指すものは競泳ではないと分かっているにもかかわらず、そうせざるを得ない日々の授業がある。



だからこそ、「水辺文化」を研究の対象として、教材化を試みてきた。水泳をトータルに教える授業の実現を

○これからの課題 例えば、

- ・ 自然との関わりの中での水泳を教える。
- ・ 水と人との科学的な内容
- ・ 日本泳法の実践化

しかし「水辺文化」は「水泳軽視」に本当に対峙できるのだろうか？